金魚の水槽

弓月キリ
月夜のよろず屋

目次

プロローグ 6
男性A視点 9
女性A視点 11
子供視点 12
女性飼育員視点 14
男性B視点 16
子供視点2 18
エピローグ 22
あとがき 26

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる環境により、表示の差が認められることがあります。

本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のものです。作中において現代では若干耳慣れない言葉・表記・表現が登場する場合がありますが、これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。

なお、発行している小説本やグッズは、すべて自分で製本・制作しています。（全てコンビニプリントやセルフプリントで印刷し、自分で平綴じ製本またはフリーソフト等を使って電子書籍データへの変換をしております）

そのため、乱丁・落丁・あまりにもひどい汚れ等がありましたら、お取替えさせていただきますので、弓月キリまでメールかＴｗｉｔｔｅｒのＤＭ等にてお知らせください。

読んでいて気になりそうな汚れや不揃いの部分、ズレなどはできるだけないように配慮して印刷・製本・制作をしておりますが、本文に影響のない軽微な汚れやズレなどは何卒ご容赦いただけますと幸いです。

プロローグ

男は知らない。もちろん、男と一緒に来た妻や子供も知らない。
ここで起こる不思議で少しだけ怖い出来事が起こることは、この時点では誰も知らないのだ。

だから、男は妻と子供の手を引いて水族館へ向かっている。

「すいぞくかんだー！」
逸る気持ちを抑えることもせず、子供は水族館の入り口に向かって走っていく。
「水族館は逃げないから、走らないの！」
人気の水族館故に人が多い。怪我をしないように子供を叱る妻を男は微笑ましいものを見るように優しい笑みを浮かべながら見ていた。
（これだけ天気が良いなら、今日は水族館よりも公園の方が良かったか？）
男がそう思うのも無理はない。それくらい今日は梅雨が明けて久しぶりの快晴とも呼べるほどの良い天気なのだ。
「ねぇ。パパもちゃんと叱ってよ！」
「え、ああ……」

男自身、幼い頃に両親に水族館へ連れて来てもらった時、同じようなことをした覚えがあるのだ。叱らないといけないのはわかっていても、子供の気持ちがわかる故に躊躇ってしまう。

「はやく、はやくー！」

「わかったから！」

「少し落ち着け。そうじゃないと水族館の中に入れないぞ」

「えー！　それはヤダー！」

「じゃあ、少しは大人しくしような」

「はーい」

子供を宥めることでその場を切り抜けた男は、大人二枚と子供一枚の入場料を支払ってチケットとパンフレット、イベント案内のチラシを受け取った。

「深海魚特集？」

「怖そうね」

「きもちわるい」

「俺は興味あるな」

「えー、そう？」

「まりは、みてもいいよー」

「お。真理は嫌じゃないのか？」

「きもちわるくて、ちょっぴりこわいけど、へいきー」
「そっか。ありがとうな」
「へへ～」
子供は大好きなパパである男にお礼を言われてくすぐったそうに笑う。嬉しくて少しだけ照れているのだ。
「仕方ないなぁ。ママは、あんまり長居はしたくないけど、見に行きましょうか」
「やったー」
「やったー」
こうして男達は水族館の深海魚コーナーに向かって水族館に入場したのだった。

男性A視点

（ここは、どこだ？）
男が気づいたとき、周りには誰もいなかった。
（そういえば、俺は何をしていた？）
記憶を思い起こそうとしてみる。
（そうだ。水族館に家族で来て、深海魚コーナーで子供が泣き出したから宥めていたんだよな……？）
先程まで一緒にいた男が愛する家族の姿が見当たらない。薄暗く青色に鈍く光る部屋には男一人だけ。
声も聞こえない。聞こえるのは、僅かに聞こえる機械音と水音だけ。
（ここは、深海魚コーナーじゃないのか？）
さきほどまで見ていた深海魚特有の不思議な怖さも今は見えない。
（しかし、皆はどこに行ってしまったんだ？）
どれくらい意識を失くしていたのかもわからない。
（もしかして、誰かを呼びに行ったのだろうか？）
その時、男は気づいた。

さきほどまであったはずの通路や非常口も見えない。
さきほどまでいたはずの人間が彼以外には誰もいない。

（ここは、死後の世界というヤツなのだろうか？）
男は、頭を左右に少し強めに振って、浮かんだ不吉な考えを追いだそうとする。

「金魚？」
目の前を出目金が泳いでいったのを見て、男は思わず声を上げていた。

――俺は、夢でも見ているのか……？

水もないのに、金魚が自由自在に泳いでいる。不思議な現象に男は呆然と立ち尽くすしかできなかった……。